

令和3年度 徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館協議会

【日時】

令和3年9月29日（水）午後1時30分から午後3時30分まで

【場所】

徳島県立博物館 講座室

【出席委員】（50音順、敬称略）

安倍 久恵（フリーアナウンサー、佐古絆文化協会事務局）〈副会長〉

生駒 佳也（徳島県立阿南光高等学校教諭）

塩瀬 隆之（京都大学総合博物館准教授）

瀬戸 恵深（株式会社エフエムびざん放送部ディレクター）

西 記代子（四国大学文学部講師）

原 多賀子（京都外国語大学非常勤講師）

町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）〈会長〉

松村 幸恵（阿波市国際交流の会会長）

森脇佳代子（阿南市立羽ノ浦小学校PTA人権教育広報研修部役員）

※欠席1名

- 1 開会
- 2 館長挨拶
- 3 委員紹介
- 4 議事

- (1) 令和2年度事業実施状況について
- (2) 令和3年度予算及び事業概要について
- (3) 徳島県立博物館新常設展について

(1) 令和2年度事業実施状況について 質疑応答

委員	鳥居龍蔵記念博物館について、令和2年度には、記念論集の出版などとともに、「鳥居龍蔵生誕150周年記念 全国高校生歴史文化フォーラム」も実施している。『年報』や『報告書』によれば、全国から多くの高校生の応募があったようであるが、その成果について簡単に説明してほしい。
事務局	全国の高校生から自主研究を募った事業は、鳥居龍蔵の生誕150周年を記念して、初めて実施した。事業の目的は、全国の高校生に鳥居

龍蔵やその業績について知ってもらおうとともに、人材育成を図ることである。本来であれば、県外の高校生に徳島県まで来て発表してもらおう予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインでの発表となった。それでも、高校生から「参加して良かった」という意見が出るなど、県内及び県外の高校生にとって意義深いものとなったと思う。県内の高校生に関しては、引き続き「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」を行った。全国フォーラムには、県内フォーラムの中から上位2校が参加した。なお、令和3年度も「全国高校生歴史文化フォーラム」を実施すべく準備を進めている。

委員 記念事業で終わらずに継続して実施することは、すばらしいと思う。こうした取り組みを、他の博物館で企画・実施している例はあるか？

事務局 地域レベルでコンクールなどを行っている事例はあるが、全国規模で公募する取り組みは、かなり少ない。令和2年度は、鳥居龍蔵生誕150周年記念ということで一般財団法人自治総合センターから助成を受けたため、初めてながらも大々的に打ち出すことができた。

委員 高校生の段階から、実際の資料に基づいて何が考えられるのか思考する良い機会だと思う。

委員 「鳥居龍蔵生誕150周年記念 全国高校生歴史文化フォーラム」は、全国の高校生から自主研究を募集するという、画期的な取り組みだ。高校生がそれぞれの地元の歴史に誇りを持ち、さらに調査研究を行うきっかけとなっていると思う。鳥居龍蔵記念博物館については、鳥居がマチュピチュを訪れたことを紹介する企画展が以前あったが、そのように、誰もが関心を寄せるようなテーマと鳥居とを絡ませてスポット的に展示するのが、広報という点においても良いと思う。

委員 県立博物館の広報戦略の策定について聞きたい。以前学生に、博物館リニューアルを知っているか尋ねたが、知っている学生はほとんどいなかった。学生の情報入手の方法はSNSが中心となっており、そのような中で、広報に力を入れた取り組みは良いと思う。その他、コロナ禍での取り組みとして、「自宅で博物館を楽しもう！」というデジタルコンテンツが印象的だった。内容は、すでに博物館が持っている情報や調査研究の成果であったとしても、利用しやすいよう工夫した点は非常に効果的であると感じた。このように、広報に力を入れていることはわかるが、先ほど事務局から説明があった「広報戦略」の中身について、もう少し教えてほしい。

事務局	令和3年度は、特に県内の広報に力を入れており、またホームページのリニューアルも予定している。過去のアンケートなどにより、当館はファミリー層の利用がメインとなっており、引き続きこの層に対する広報を行う。さらに新たな取り組みとして、20代、30代、50代以上の層への情報発信を考えている。いわば「大人向け」の広報で、現在その一環としてポスターを作成中である。
委員	広報に関連して、個人的にはリニューアルした博物館を何度でも訪れたいが、一緒に行く娘は必ずしもそのように思っていないようだ。子どもを惹き付ける工夫が必要だと思う。大きなリニューアルの後の「変化」、例えば小規模な展示替えなどについて、どのようにアピールや情報発信をするかが大事になってくる。例えば、SNSなどを活用して、細かく発信できるものもある。小さな「変化」をリアルタイムで情報発信することが大事だが、何か方法はあるか？また、情報発信とともに人を惹きつけるワードも重要だと思う。
事務局	現在当館ではFacebookを利用しており、日々の変化について情報発信を行っている。また、ホームページもリニューアルする予定であり、さらに活用したいと考えている。
委員	県立博物館のFacebookページを見た。動画がすばらしいと感じた。これまではポスターのような静止画像ばかりだったが、やはり動画の方が親近感を抱きやすい。いかに興味を持ってもらえるかが重要だ。
事務局	Facebookでシェアしてもらうことや、口コミの影響力は大きいと感じている。できる限り積み重ねていきたい。
委員	鳥居龍蔵記念博物館について聞きたい。現在の「徳島歴史文化フォーラム」（県内の中学生と高校生が応募の対象）は、2014年に原形となる連携が始まった。しかし、『年報』を見ると、高校生や大学生の観覧者は非常に少ない。鳥居のフォーラムが契機になり、鳥居龍蔵を知る、あるいは来館に結び付けば良いと思う。先日、高校生とともに県立博物館の新常設展を訪れ、展示の感想を聞くと好評だった。ただし、そのとき周りを見ると、実際に来ているのは家族や子ども（未就学や小学生）のファミリー層ばかりで、他の高校生の姿は見られなかった。高校生に対して、どのようにして博物館の知の体験へとつなげるのか。博物館と学校とのつながりは当然必要であり、どのように結びつける

べきか、継続して検討してもらいたい。

事務局 ご指摘のとおり、高校生や大学生の利用は非常に少ない。特に高校生の利用は、ゼロに近い。高校生の場合、学校や部活、塾などにより、時間が限られていると思われる。ただし、過去に鳥居龍蔵をテーマとした取り組みを高校生と一緒に行ったことがあり、中には深く興味を抱いてくれた生徒もいた。その経験から、人数は大量に望めなくても、体験等の質を向上できたらと考えている。鳥居のフォーラムを通じて多少高校生の出入りはあるが、恒常的な来館につながっているとは言えない。ただ、「来てみれば面白い」という反応はあるため、そのきっかけをどうつかむのか、難しい課題だが継続して考えていきたい。

委員 高校生の参加に関して、地域の状況を踏まえると、自宅から博物館への距離の問題があり、アクセスが難しい点があげられる。小学校・中学校については、先生がクラス単位で指導できるが、高校は教科単位での指導となるため、教科の単元に内容が出てこない、あるいは教科の先生に興味を持ってもらわないと来館にはつながらない。以前ノーベル化学賞受賞者をテーマにした展示を行った際、化学の先生向けにレクチャーを行ったところ、生徒を連れて来てもらった。高校生に対しては、教科を絞るとともに、先生向けにレクチャーを行うと来館に結び付く可能性がある。

令和4年度から、高校では新たに「探究」科目が始まる。学校の先生からは、日本史や古典の探究については学校で指導しづらく困っている、という意見を聞く。「探究」に絡めて先生向けにテーマを提示する方法もある。博物館は「探究」のテーマの宝庫だと思う。

(2) 令和3年度予算及び事業概要について 質疑応答

委員 先ほど質疑があった高校生の課題に関わって質問したい。鳥居龍蔵記念博物館の『年報』にある「資料整理ボランティア」について、今の整備状況を教えてほしい。また、ボランティアを通して、高校生が博物館資料の魅力を知ってもらうための手段としてはどうか。

事務局 現在、資料整理ボランティアは、徳島県シルバー大学校卒業者や鳥居龍蔵を語る会、旧職員らの協力を得ながら、月2回程度の頻度で実施している。資料を確認し写真撮影するという地道な作業だが、新たな発見も少なくない。ただし、資料整理ボランティアを高校生とともに進めるのであれば、新たに別のやり方を考える必要があると思う。確かに、高校生に資料の魅力を知ってもらうための取り組みとしては意

	義深いと思う。
委員	先ほどから話題にあがっている高校生に関わって、鳥居龍蔵記念博物館と国立台湾史前文化博物館との交流は、コロナ禍で国際連携・交流が少なくなっている現状を踏まえると、高校の「探究」のテーマとして興味を持ってもらえると思う。台湾との交流をテーマに、鳥居龍蔵を調べるという形であれば、資料そのものの魅力だけではなく、国際連携という観点から関心を高めることができると思う。
委員	「日本最古級恐竜化石含有層調査・発信プロジェクト」について、今後の展望について教えてほしい。
事務局	令和3年度については、10月から斜面に重機を入れ本格的に発掘調査を行うための準備をしている。11月中旬から重機を用いた調査を開始し、12月下旬まで実施する予定である。プロジェクトに係る協議会も年2回開催する。なお、今年度からは勝浦町が購入した土地で発掘作業を進める。
委員	鳥居龍蔵記念博物館の資料整理について、「資料整理ボランティア」以外ではどのように進めているのか？
事務局	職員構成については以前と同じであるため、少ない本務職員が中心となって、日常的に資料整理を行っている。なお、令和元年度から始まったデジタルアーカイブ事業により、業者に委託して撮影した資料写真（高精細画像）を、インターネットを通じて少しずつ公開している。台湾との交流が進もうとしているのも、その公開がきっかけの一つとなっている。引き続き、資料の整理を行うとともに、同時に内容を正確に調査する必要がある、近代資料の読解能力のある人に関わってもらえればと考えている。また、資料の読解という点においては、京都大学の「みんなで翻刻」プロジェクトなど、オープン型の取り組みを参考にして、仕組みづくりを検討していきたいと思う。

(3) 徳島県立博物館新常設展について (新常設展見学後の意見や質疑)

委員	以前の常設展示と比べると、非常に雰囲気が変わった。展示室の面積や天井の高さは変わっていないはずだが、とても開放感があった。
----	---

委員	<p>すばらしいリニューアルであり、想定以上の変化を感じた。学芸員や関係者の方々の情熱と努力の賜物だと思う。以前から、しばしば子どもと来館していたが、子どもはリニューアル前の常設展について暗い印象を持っていたようである。リニューアル後は、明るく楽しい雰囲気となり、怖がらずに自ら進んで見学していた。展示資料の他にも、体験コーナーやさまざまな仕掛けが設けられており、子どもの知的好奇心を広げる内容となっている。来館したとき、周りの家族連れを見ても子どもが率先して見学し、さらに親子間の会話も見られた。デジタルコンテンツへの反応も良く、夢中になって楽しんでいた。リニューアルによって、未就学の子どもも充分楽しめる内容となり、博物館が好きになる間口が広がったと思う。</p>
委員	<p>展示内容に加え、部屋ごとにデザインが異なるカーペットが敷かれ、またLED照明の雰囲気も良いと思う。タブレットを用いたVRやARの体験も、興味を惹き付けるものがあり、いろいろな楽しみ方があると感じた。以前から、レファレンスなどの対応が丁寧で学芸員と県民とが近い距離にあると感じていたが、展示室に学芸員の顔のイラストもあり、より一層親しみを持てる感じた。リニューアルの期間は新型コロナウイルス感染症のことで苦労したと思うが、その点について教えてほしい。</p>
事務局	<p>令和2年3月末に着工し、4～5月に本格的な業務開始の予定だったが、緊急事態宣言などの影響で、実質的なスタートが6月となった。さらに、設計の見直しをする中で、コロナへの対応をどのようにするか議論を重ねた。具体的には、設計段階で重視していた「ハンズオン展示」について、利用者のリスクを可能な限りなくすために、来館者の理解や協力を得ながら進めていくことにした。直接資料を消毒することはできないため、利用者に手指消毒してもらって感染リスクを下げるよう、ハンズオン展示の近くには消毒コーナーを設置するなど、その意識づけをしてもらうことにした。その一方で、子どもたちが遊びながら博物館に親しんでもらうためのキッズスペース「こどもゆさん」を設けたが、当面は利用を控えてもらっている。メリハリを付けながらコロナに対応する、ということで職員、展示業者ともに合意に至り、オープンを迎えることとなった。</p>
委員	<p>新常設展は、ワクワクする空間であると感じた。さらに多くの来館者を増やすために、文化の森総合公園内にある図書館、近代美術館、文書館など他館を利用する方が博物館に来館するような工夫が必要である。横のつながりがわかるよう、より一層展開させていてもらいたい。また、1階にあるミュージアムショップでは、オリジナルグッズ</p>

を増やすなど、充実したものになればと思う。

委員 ハンズオン展示についての話が出たので補足したい。子どもの反応が非常に良く、すべてのハンズオンを体験し楽しんでた。大成功だと思う。

委員 近年、県立博物館の使命に「県民とのつながりを大切にする」が加えられた。新常設展では、「県民コレクション」が設けられるなど、また学芸員の顔がわかる展示も増え、意識的に県民とのつながりを感じることができ、良いと思った。博物館に来れば学ぶものや楽しめるものがあるため、その意味でもやはり広報は重要である。広報専任の職員がいれば、より効果的であると思う。

事務局 広報専任の職員はいないが、各職員が頑張って広報に取り組んでいる。

委員 いろいろな人に見てもらおうという気持ちが伝わってくる展示となっている。広報の点については、展示を楽しめる位置から写真を撮り広報に使うなど、写真の撮り方を変えた方が良いと思う。展示室内の楽しめるポイントが重要であり、例えば、「徳島の自然と暮らし」の「セミの声」では、聴く場所を示すなど、来館者とともに楽しめることを共有すると、より良くなると思う。「近世の徳島」の「みとものつら絵巻」のセリフ付きの吹き出しも面白い。さらに、ワークショップ等で子どもに吹き出しのみをつけて配付し、セリフを考えるなどすれば、事前学習や事後学習にも使えると思う。「先史・古代の徳島」では、「まがり柄」の鍬を触りたいとも感じた。ただし、固定するならば逆向きにしても良いのではないかと思った。
リニューアルの準備段階において、インクルーシブデザインワークショップを通して関わったが、それが活かされた良い常設展になったと思う。

委員 展示ガイドを聞きながら見学した。ガイドの長さは、ちょうど良いと感じた。新常設展がオープンした後に高校生と訪問し、旧常設展示を知っている生徒に意見を聞いた。以前の展示はショーケースの中に資料が並んでいるイメージだったが、新常設展では展示が立体化されている、という高校生の意見があった。見学する動線については、いろいろな意見があると思う。とくに「10 歴史・文化コレクション」へ入る際は、袋小路になっている印象を持った。動線については、工夫が必要だと思う。あと、若い世代のためにアプリの精度を、さらに充実したものにしてほしい。

- 委員 午前中に初めて新常設展を見学し、午後に再び学芸員の解説を聞きながら見学した。興味深いポイントがいくつもあると感じた。博物館に興味がある方のために、学芸員による展示解説を行ってほしい。
- 委員 リニューアルについては、学芸員を中心とする職員の努力が感じられた。さらに、資料の来歴などがわかれば、資料の存在意義が一般の方にもわかると思う。また、より一層広報に力をいれてほしい。
- 委員 渡された貸出用のタブレットを見る暇がないくらい、展示内容が充実している。ワクワクする展示となったと思う。県立博物館は総合博物館であるため、リニューアルに向けて「総合」をどのように意識するかが課題であったと思う。例えば、「地質時代の徳島」と「先史・古代の徳島」では、分野は異なるがナウマンゾウと石器が同じ空間に展示されていたのが印象的であった。また、徳島を代表する3つ川（吉野川、那賀川、海部川）の展示では、川によって環境と生きものが異なり、その上で人々の暮らしが成り立っているという展示であった。専門分野を越えた展示を意識していると感じられ、工夫が見られた。さらに、地球セクションの「生物の多様性」では、生物の骨と剥製が並んで展示されていた。このように対比することで、来館者が初めて気づく点が少なくないと思う。
- その上で、次の2点について検討してほしい。1点目は、リニューアルにあたり行われたさまざまな議論を、研究報告などに記録として残してほしいということ。その記録が将来、活かされることがあると思う。2点目は、観覧料について。現在は常設展と企画展とでそれぞれ個別に入館料を支払う必要がある。それは鳥居龍蔵記念博物館についても同様である。セット購入のようにできないか、料金体系を見直してほしい。
- 事務局 さまざまなご意見やご高評に、お礼申し上げます。旧常設展においても、その時々で部分的な改修を行ってきた。新常設展でも、将来改善を行う必要が生じると思う。今回のリニューアルに関する一連の経緯については、記録を残していくつもりである。また、観覧料については、このたび3館（県立博物館、鳥居龍蔵記念博物館、近代美術館）の常設展についてセット販売を導入し、2割引で入館できるようになった。来館者の中には、利用者もいるようである。今後さらに工夫を重ねていきたい。引き続き、委員の皆様からご指導いただきたい。
- 委員 今回出された意見や提言を、今後の博物館運営に活かしてほしい。

以上